

— 次の文章を読み、後の問に答えなさい。 —

その砂漠さばくの村で、雨乞あまごいは、昔からみな尊敬を集めてきました。仕事というより一種の芸能、スターといったほうが近いかもしれない。雨乞いの家に生まれないかぎり、けして雨乞いにはなれません。おさないうちから研鑽けんさんを積み、地と空の間に身を渡す絶妙ぜつみょうなバランスを、からだの深い芯しんに、覚え込こまさなければならぬのです。

村のことばで「かぎ」という名をもつその男の子は、^①まあまあ雨乞いの家の、五男として生まれました。兄のうち二人は、赤ん坊あかぼのうちにキツネにもつていかれ、あと二人の兄は、年少のころから、乞い手としての才覚を示していました。「かぎ」は名前のとおり、両膝りょうひざがうまれつき、がに股またにねじまがっていましたので、父親はもちろん、周囲からもまるきり期待はされず、本人もそれを感じてか、多少引つ込み思案な性格に育ちました。

若い雨乞いたちは、それぞれの技わざを舞台上で競きいました。

「かぎ」の長兄ちやうけいと次兄は、独自の技を磨みがくいっぽう、古い型の習得にもヨネンaがない、模範もはん的な雨乞いでした。おまけに見栄みばえがとて面白い。老若ろうにやくを問わず、ふたりの舞台にはおおぜいの見物人が集まります。あるとき、彼らが伝統の型でゆつくりと踊おどっている最中、星空に真綿まわたのような雲がかかり、雨期でもないのに、ぱらぱらと小雨が降ってきた。村じゅうのものがたまげました。よほどのベテランでさえ、こんな真似まねはそうはできません。

兄弟はその日から、「雨雲に気に入られたもの」を示す、本物の雨乞い衣装いしやうを許されました。「かぎ」には、触ふれることさえためらわれましたが、やさしい兄たちは小屋のなかで、^②「かぎ」にもこっそりと衣装をかぶせてやりました。^③踊る弟に、ささやかな拍手はくしゅまで送ったのです。まじないに関わるしきたりを、兄弟は多少、甘くみていたかもしれませんが、しきたりを破るものに、しきたりは必ず、^③苦い返礼へんれいをよこします。三人がらくだを連れ、村

はずれの荒れ地を横切あっていく最中、彼らの足もとで何かがカチリと音をたてた。轟音こうおんが村にとどろきました。兄たちのからだは粉々になって、砂漠じゅうにちらばりました。

「かぎ」はねじまがつた両膝から下を失いました。らくだは無傷でした。
 「かぎ」はほとんど喋らなくなりました。両手に靴をはめ、バケツや麻袋を背負い、えつちらおつちらと砂山を歩きます。雨乞い中の石舞台へは、近づくことさえ許されません。よしんば許されたにせよ、即座に石くれで追い払われたことでしょう。しきたりを侵し、人気者の兄たちを粉々にした「かぎ」は、近隣のひとびとからひどく憎まれました。

「あいつが粉々になればよかったのに」

堂々とみながいいいます。「かぎ」のころはばらになりそうでした。

年のはじめにヨチヨウはあった。渡りの時期でもないのに、鳥たちがいつせいに北へと飛んだのです。年寄りたちは青ざめました。日々の給水量をできるかぎり減らし、池の底へはヒソウの玉石を投げ込んだ。けれど、毎年春にやってくるはずの薄雲が、六月になってさえ、いつこうに姿をみせません。そのまま夏が来しました。気温は記録的に跳ねあがりました。太陽は例年よりいつそう時間をかけ、じりじりと空をよぎっていくように見えました。らくだが倒れ、ひとびとは喉をかきむしる。ため池は干上がりかけています。年寄りたちは、これまでにないダイキボな雨乞いを催すことにしました。ベテランたちはもちろん、若手や子どもまでがソウドウインされ、石舞台の上に並びました。目を見はる壮観です。何十人も雨乞い師が、それぞれの踊りを無軌道に踊りはじめる。村人は興奮し、砂地で飛びはねます。

自然はやりすぎを嫌います。押しつけがましいおおげさな雨乞いに、砂漠の空はあきらかにつむじを曲げたのです。分厚い雲がまたたく間に集まってくる。やがて雨粒が降ってきました。村人たちは歓声をあげ、水滴を顔にこすりつけた。雨はすぐ、滝のような勢いに変わった。奔流がそこらの砂地に穴をうがつ。雨乞いたちは踊りやめ、舞台に立ちつくします。しかし雨はやまない。バシンバシンと豪雨が砂漠を打つ。

雨は翌日も、さらに翌日もつづいた。ため池はあふれ、らくだは泥にまみれている。老人たちには、雨音の向こう

に、ずるずると何かが滑る物音がきこえます。それは砂漠の動く音でした。もうじき村を、水を含んだ砂の波が、覆い尽くそうとしているのです。

「見ろよ！」

どこかで男が大声をあげる。

「誰かがまだ外で、あんな踊りを！」

村人たちは小屋から出てきます。雨風に揺れる物見台の上に、小さな人影がひとり、ぼつんといました。それは「かぎ」でした。台座の上でぎくしゃくとした、奇妙な動作をつづけています。ベテラン雨乞い師のひとりがいきり立ち、物見台に登ろうとしました。長老が彼の肩に手をかけて、首を振った。

「よく見なさい」

と長老はいいました。

「わしらの目は砂に覆われていた。あれは特別な男だった。ふたりの兄たちにくらべてさえも。さあ、見なさい。かぎの踊りを。あれらは全部、わしたちのためにしておるんだ」

「かぎ」は逆立ちで踊っていました。真つ暗な空に、途切れた足を向け、ばたばたと絶え間なく動かして。兄たちの雨乞いの裏返し。雲のはてへつづく透明な両脚。あたりは夜闇に包まれ、もうなにも見えません。闇のなか、雨音が少しずつ、やすらかに静まってくるのがわかる。朝方誰かの吐息のような、大きな風音が砂漠に響いた。そしてそれきり静かになった。

朝日がのぼる頃、雨はやんでいました。物見台の上には、誰の姿もありませんでした。ほうぼうの水滴に陽光がきらめく。長老は晴れ渡る空を見あげ、「かぎ」は雨とともに行ったのだ、とつぶやいた。さあ、誰より雨雲に氣に入れた男に、わしらはわしらの手向けを送ろう。

村人たちは石舞台に集まり、本物の雨乞い衣装に火を放ちました。ぱちぱちと音をたて、真つ白い煙があがってい

きます。空には巨大な虹が出ていました。ベテランの雨乞い師たちや年寄り火のまわりでゆっくりと踊った。遠ざかっていく誰かを目で追うように、薄れゆく虹の光を、ただじっと見あげながら。

(いしいしんじ『雨乞いの「かぎ」』による。)

問一 この文章を大きく二つに分けると、後半の文章はどこからと考えられるか。最初の五字をぬき出さない。

問二 — 線部①について。ここから「かぎ」がこの村においてどのような存在として生まれたことがうかがえるか。簡潔に説明しなさい。

問三 本文中の を補うのに最もふさわしいことを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いそいそと イ あたふたと ウ おずおずと エ てきばきと

問四 — 線部②について。「まじないに関わるしきたり」とは具体的にどのようなことと考えられるか。簡潔に説明しなさい。

問五 — 線部③について。この後に起こる出来事が、偶然によるものではなく「返礼」であったということが最もよくうかがえる「文」を探し、最初の五字をぬき出さない。

問六 — 線部④について。この時の「かぎ」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問七 — 線部⑤について。「無軌道に」という表現から感じられることとして、ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雨乞いの他に解決法のない村人たちが必死になっていること。
イ 今までにない深刻な干ばつに村全体が混乱しきっていること。
ウ 雨乞い師たちが競い合って気持ちがまとまらないでいること。
エ もはや正しいとは言えない方法で雨乞いが行われていること。

問八 次の表現は、ある一文の前半部分におかれていたものである。これに続く文の最初の五字をぬき出さない。

売られた喧嘩へ拳を返すように、

問九 — 線部⑥について。この表現から「かぎ」の踊っている様子についてどんなことが感じられるか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 両脚を失ってから、ひそかに踊りの練習をしてきたことをわかってもらおうと、「かぎ」が頑張っていること。
イ 両脚を失っているはずの「かぎ」の踊りが、完全な形をなしていて祈りを空へと通じさせるものであること。
ウ 失った両脚を空へ向けて「かぎ」が踊る姿は、天国にいるふたりの兄も必ず見届けてくれるものであること。
エ 失った両脚を透明な雨に打たせ続けながら、「かぎ」自身の命も、今にも空へと消えかかろうとしていること。

問十 — 線部⑦について。村人たちがこのような行動をとった理由を考えて、説明しなさい。

問十一 — 線部 a、e のカタカナを漢字に直して書きなさい。

(二の問題は次のページからはじまります。)

朋二

次の文章は、ある中学校の美術教師・太田恵美子さんの、授業のようすや考え方をレポートした文章のいくつかの部分である。これを読んで、後の問に答えなさい。

著作権上の都合により未掲載

著作権上の都合により未掲載

問一 〓線部 a d のカタカナを、漢字に直して書きなさい。

問二 本文中の【 1 】【 2 】を補うのにふさわしい語を、それぞれ考えて答えなさい。

問三 〓線部①「記号が描けることは大切だ」について。ここでいう「記号」とは、どのようなものだろうか。自分で考えて、簡潔に説明しなさい。

問四 〓線部②「ものの形を描くと記号になってしまうのは問題だ」について。どういう点で問題があるのだろうか。後にくくCとDの部分から読みとれることを、それぞれわかりやすく説明しなさい。

問五 〓線部③「十人十色」の読みを答えなさい。

問六 〓線部④「ホッとして自信が芽生えてくる」に関連して。逆に言うと、どういう考え方のときには、自信が芽生えにくいというのだろうか。理由も含めて、わかりやすく説明しなさい。

朋

問七 — 線部⑤「心の眼でもを見る」とは、ここではどのようなことか。次の中で最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

07 桐

ア 他の人と決して同じではなく、自分の心には感じられない点を意識して見ること。
イ 目の前の物体が大事なのではなく、自分の心がどんなものかを知るために見る事。
ウ 先入観ではなく、自分の心にどう映っているのかという点に素直になって見る事。
エ 他人の指示に従うのではなく、自分の心のままに自由な空想を重ねながら見る事。

問八 — 線部⑥に関連して。この文章の中で言われている「プライド」とは、どういうものなのだろうか。本文全体から考え、できるだけ自分のことばで、くわしく説明しなさい。